

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13000

研究課題名（和文）ルーチョ・フォンターナの新しいモノグラフィの為に：補完研究として

研究課題名（英文）For a new Japanese monography of Lucio Fontana: a complementary study.

研究代表者

巖谷 睦月（IWAYA, Mutsuki）

東北学院大学・教養教育センター・准教授

研究者番号：40749199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はこれまで日本のモノグラフでは扱われなかった《ネオンの構造体》に主眼を置き、フォンターナが本格的に活動を始めた1930年代と空間主義者としての評価を得てゆく時期にあたる1950年代の社会・政治状況の変化の問題、芸術家のアイデンティティの問題が作品制作に影響を与えた可能性を明らかにした。また、空間主義の宣言文の全邦語訳を目指し、未来派的世界再構築の翻訳を踏まえ彼我の比較を実施することで精度の高い翻訳の準備に繋がった。加えて、瀧口修造による最初のモノグラフ成立の過程と内容を検討し位置づけた。以上により、新たなモノグラフ発表に向け先行研究に欠けた視点を補うという目標を部分的に達成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本において、芸術家ルーチョ・フォンターナについて専門的に扱った書籍は1964年と2016年に発表されている。しかし、これらの書籍は主に彼のカンヴァスを用いた作品についてと日本における受容を扱っており、インスタレーションを中心とする作品への言及や、空間主義者として発表した複数の宣言文の内容検討と全訳などはおこなわれていない。また、国内外において、本人がアルゼンチンで生まれたイタリア移民の子でありながらイタリアの芸術家として理解されてきたことへの疑問も呈されてはこなかった。この欠けた部分を埋めるモノグラフを執筆するために本研究を実施し、そのための準備を部分的ではあるが整えることができた。

研究成果の概要（英文）：First, this research study focused on Neon Structure (1951) which has not been treated in Japanese monographs until now. It is possible that changes in social and political conditions from the 1930s to the 1950s influenced its production and it can be pointed out that the issue of the artist's identity may have influenced the production of the work. Next, this study turned to the goal of properly translating all of the manifestos of Spatialism into Japanese, beginning with a new Japanese translation of Ricostruzione futurista dell'universo (1915). Then, a comparison of the content of the Futurist's and Spatialist's manifestos was conducted, preparing a more accurate translation. Finally, this study examined in detail the process and content of the first Japanese monograph by S. Takiguchi and positioned its findings. In sum, this research study has partially achieved its objective of filling in the missing perspectives in previous monographs in preparation for the creation of a new one.

研究分野：20世紀イタリア美術

キーワード：20世紀イタリア美術 ルーチョ・フォンターナ 空間主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、第二次世界大戦後のイタリアにおいて中心的な前衛芸術家の一人と目される、ルーチョ・フォンターナ(1899-1968)の新たな日本語モノグラフィの執筆に向けて計画された。

この芸術家は、イタリア移民の子としてアルゼンチンに生まれ、幼少期に父の母国であるイタリアに渡って教育を受け、1930年代から本格的に芸術家として活動を始めた。その活動の主な舞台はイタリア、特にアトリエを設けたミラノであったが、義勇兵として参加した第一次世界大戦後の数年間と、第二次世界大戦期の数年間はアルゼンチンでも活動している。特に後者の時期においては、ブエノスアイレスの若い芸術家たちとの交流のなかで、戦後に戻ったイタリアの前衛芸術を牽引する「空間主義」につながる思想が形成されてゆく。芸術家本人の作品のうち、この「空間主義」と結びつけられるのは従来、《空間概念》と名づけられたシリーズのもので、なかでもカンヴァスに穴や裂け目を施した作品がよく知られている。

研究開始当初までに日本国内で出版されていたこの芸術家のモノグラフィは二点であり、そのうち一点は瀧口修造による1964年のもの、もう一点は谷藤史彦による2016年のものである。これらはいずれも国内におけるフォンターナのモノグラフィとして重要だが、出版された時代の制約や主眼が置かれた論旨の制約により、検討のなされていない部分が存在する。それは(1)フォンターナのアルゼンチン時代の活動やその出自の作品への影響、(2)1940年代後半から複数制作されたインスタレーションについての言及、(3)「空間主義」の宣言文の内容の詳細といった部分である。

このうち(1)については、アメリカを中心に2010年代後半からアルゼンチンでの活動期に注目する研究が増えはじめており、アルゼンチン国内でもフォンターナを自国の生んだ芸術家として扱う場面が見られつつあった。国内での言及は1990年代末の峯村敏明のアルゼンチンにおける宣言成立過程に関する報告を除けば詳細なものはない。(2)については、2010年代後半からイタリア国内において残された資料をもとにした詳細な再現制作展示が実施されるなど、新たな展開が見られた。国内での言及は、報告者によるものを除けばほぼないに等しい。(3)については、2010年代よりイタリアでは宣言文を改めて収録した文献がしばしば発表されており、フランス語に訳した宣言文の集成などの出版も確認される。国内の状況については、瀧口のモノグラフィにアルゼンチンで1946年に発表された白の宣言(神吉敬三訳)および1951年の技術宣言(瀧口訳)が掲載されているものの、その内容の詳細な検討は実施されていない。これらを除いた「空間主義」の宣言文については、美術雑誌や小規模な展覧会パンフレットに個々の宣言の訳文が散見されるのを除けば、起草者にフォンターナのの名のある宣言を網羅した1990年の恩蔵昇による伝語からの邦訳以外は、報告者による邦訳・解題が発表されているのみであった。

以上を踏まえて、これらの、現在までの日本語での研究に欠けた視点を補うモノグラフィを制作すべく、本研究は開始された。

2. 研究の目的

上記の通り、空間主義者としてのフォンターナの作品には多くのインスタレーションが含まれている。これは蓄光塗料やネオンなどを使用した、光を扱う作例である。報告者はこれまでにとりくんできた「空間主義」の宣言文の内容検討と、それに関連して検討を続けてきた《ネオンの構造体》(1951年)についての研究を踏まえ、「空間主義」の思想を理解する上ではむしろインスタレーションこそが重要と考えた。このため、本研究の最終的な目的は、これまでのモノグラフィに欠けた内容を補い、最新の研究動向を反映したうえで、「フォンターナの空間主義の本質をインスタレーション作品におく日本語モノグラフィ」を完成させることとし、研究最終年度までに執筆した原稿をもとに出版助成を得ることとした。

しかし、助成期間中の思いがけない異動、感染症蔓延による海外渡航の難しい期間の発生および戦争による渡航費用の高騰があったため、特に海外での資料収集という面において支障が生じ、本来の予定に沿って計画を実行することが難しいと判断した。結果、研究期間終了即時の出版助成への応募はとりやめ、近年中にモノグラフィを完成させるための準備を進めることに目的を切り替えた。

3. 研究の方法

本研究において必要とされる方法は以下の通りである。

(1)アルゼンチンにおけるフォンターナの活動については、情報の整理されていない部分・レゾネ等の記載において情報の不正確な部分がしばしば存在するため、ブエノスアイレスを中心に資料収集および情報の確認を実施する。特に、本人の出自に関連するドキュメント・幼少期の

イタリア帰還時期に関連するドキュメント、1940年代の滞在期における教育活動の内容などについては現地での詳細な調査が必要とされる。

(2) 移民の子としてのアイデンティティが及ぼした影響については、近年の移民に関する研究において言及される、移民二世が幼少期に帰還した民族的母国で教育を受けて成長した結果としての「故郷」意識の設定の問題を踏まえる必要がある。(1)の調査による本人の生育過程の確認・インタビュー等に表れる本人の出自に関する意識の調査を前提に、空間主義の思想と作品制作における影響の可能性を探る。

(3) 教育機関において実施した講座内容や、そうした場において交流した若い芸術家たちとの関係の調査を踏まえ、1940～1946年のアルゼンチンにおけるフォンターナの活動をアルゼンチンの前衛美術の動向のなかに位置づける。これは当地で発表された「白の宣言」の成立過程に関してのみではなく、アルゼンチンの前衛美術の歴史においてフォンターナがいかなる役割を果たしたかを明らかにするために必要とされる。

(4) 1940年代末から制作の始まった複数のインスタレーション作品を中心に据えてのフォンターナの制作活動の検討については、近年の再現制作の実施にともなって進んだ素材面での調査研究を踏まえる必要がある。また、これらのインスタレーションに使用されたネオンについては歴史的に見て極めて早い時期の芸術作品への転用と言え、イタリアにおいてネオンが実用の光源として街に普及する時期について調査が求められる。加えて、ネオンの使用については、フォンターナに直接影響を与えたアルゼンチンの前衛芸術家ギウラ・コシセによる先行作例を考える必要もある。この際、本人の出生地がチェコスロヴァキアであり、世界初のネオンを彫刻作品に転用した作例がこの地の芸術家によるものであったことについても検討する。

(5) イタリアへの帰還後に発表された空間主義の諸宣言の内容の詳細な検討については、個々の宣言のこれまでの邦訳を参照の上で、イタリア語の原文を参照した新たな邦訳を作成する。この際、空間主義の重要なインスピレーション源となった未来派の諸宣言と空間主義の宣言の比較を踏まえて解題を作成し、最終的に空間主義の宣言すべての邦訳・解題を完成する必要がある。

(6) 上記の(1)～(5)を踏まえたうえで、(5)の宣言文検討から読みとれる「空間主義」の思想と、フォンターナの実際の作品制作の比較検討をインスタレーション作品中心におこなってその内実を明らかにする。

4. 研究成果

上記方法のうち、(1)についてはアルゼンチンでの現地調査が実施不可能であったため、今後の課題とした。また、(2)(3)のうち(1)を前提とする部分についても同様である。

ただし、(2)については、近年の移民研究についての資料の国内における収集と確認を実施するとともに、これまでに収集した資料および国内で入手可能な資料の範囲においては、本人の意識に関する内容をモノグラフィ執筆の準備段階としてまとめることができた。さらに、空間主義の思想と作品制作への影響を考えるにあたり、フォンターナが1930年代の未来派による航空機への注目を実地で体感する立場にありながら当時は異なった表現方法に終始し、1950年代に達してから未来派の表現を踏まえた作品制作を宇宙という新たな舞台を念頭に置いて実施するに至った点について、航空機が飛行する際とロケットが宇宙へ飛び立つ際の「飛行」の概念の違いを前提に、芸術家の出自がその表現に影響した可能性を発表した論文中で指摘している。

また、(3)については教育機関における実施講座等の内容まであたることはできなかったものの、フォンターナの関わった私設造形学校とこの学校に関わる前衛芸術グループの活動についての情報、国立美術学校での活動の一部については、資料収集およびその精査をおこなうことができたので、今後のアルゼンチンにおける現地調査を踏まえ執筆に生かしたい。

続く(4)のうち、伊・米などにおける近年の研究動向は展示情報を含め執筆の準備段階としてまとめた。イタリアにおけるネオンの普及に関する調査は実地調査を実施できていないため、今後の課題である。また、コシセの作品制作とチェコスロヴァキアにおける先行作例の関係を精査するにあたり、現状入手できた資料の確認は終了しているものの、追加調査が必要である。

さらに(5)については、近年新しくイタリアで出版された、宣言文に関連する著作を確認する必要があったため、発表予定であった翻訳・解題の再考を実施した。なお、空間主義の宣言文の内容検討にあたって、影響を与えたと見られる未来主義の宣言文の邦訳と解題の論文を作成したことで、内容理解を深めることができた。加えて、これまでの邦訳を参照して訳文を作るにあたり、瀧口修造によるモノグラフィの成立過程を調査した研究ノートも発表している。この検討内容およびもう一点の論文において、国内におけるフォンターナの需要に関連し谷藤のモノグラフィがふれていない点を埋めることもおこなった。

以上のすべてを踏まえて実施すべき(6)については、本研究の最終的な到達点となるため、現状では検討の途上である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 巖谷睦月	4. 巻 第12号
2. 論文標題 瀧口修造によるルーチョ・フォンターナのモノグラフィ出版	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学イタリア研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 69-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 巖谷睦月	4. 巻 64
2. 論文標題 《空間概念 自然》ルーチョ・フォンターナ 1959-1960 年 館蔵品紹介	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 遠山記念館だより	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 巖谷 睦月	4. 巻 33
2. 論文標題 未来派的世界再構築 を読む：空間主義の目	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 83～118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00015869	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 巖谷睦月	4. 巻 第32巻1号
2. 論文標題 1930年代と1950年代の政治と芸術をめぐる「飛行」の表現について ルーチョ・フォンターナの経験から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 発行予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 巖谷睦月	4. 巻 vol. 17
2. 論文標題 展覧会評：“ルーチョ・フォンターナ：その境界にて”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History (東京藝術大学美術学部芸術学科西洋美術史研究室紀要)	6. 最初と最後の頁 pp. 197-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 巖谷睦月
2. 発表標題 未来派の世界再構築 を読む - 目に見えないものの知覚と空間主義への影響
3. 学会等名 イタリアにおけるモダンとアヴァンギャルドの相克 未来派の宣言文を読む (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Norma R. Ceballos Aybar (Compiladora)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Co'rdoba: Brujas	5. 総ページ数 444
3. 書名 El especta'culo en la lengua y la literature italianas (担当:共著, 範囲:"Il " volo " negli anni Trenta e Cinquanta fra politica e arte attraverso l' esperienza di Lucio Fontana", pp. 139-148)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------